

NAGASAKI
じんけん歴史散歩
島原コース

島原半島を
フィールドワーク
する

NPO法人 長崎人権研究所





島原半島をフィールドワークする

もくじ

①島原城	2～3
②理性院大師堂 台山天如塔	4
③今村刑場跡	5
スポット①医学を支えた人々—「解剖」の歴史	6
スポット②「島原大変」と普賢岳噴火	7
④旧大野木場小学校	8～9
⑤セミナリオ跡・吉利支丹墓碑	10
⑥原城	11
スポット③島原・天草一揆	12
スポット④からゆきさん	13
⑦口之津歴史民俗資料館	14～15
⑧雲仙地獄・耳採	16
⑨首塚・千々石ミゲル碑	17
島原の子守唄・考	18～19
奥付	20

1 島原城



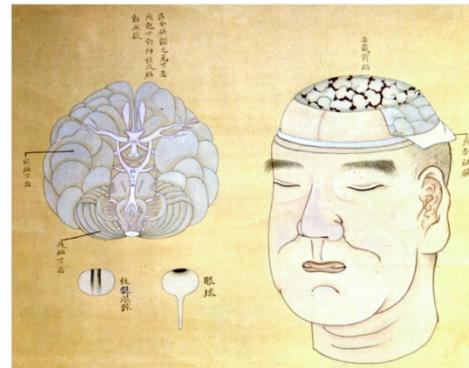
島原市城内

島原城は、有馬直純が延岡に移ったあと、1616年（元和2）奈良から来た松倉重政が原城を廃し1624年（寛永元）築城、森岳城ともいわれる。1874年（明治7）廃城。現在の天守閣は、1964年（昭和39）に復元された。城内には、キリストン史料館（天守閣）、北村西望記念館、キリストン墓石などがある。史料館には、有馬時代の南蛮貿易、キリストン関連遺物、禁教時代の隠れ（潜伏）キリストンの遺物、島原・天草一揆攻防の図、踏絵や禁制の立札、宗門人別改帳などキリストン禁令にかかわる資料などが数多く展示される。

また、天守閣に登ると、島原市街地はもとより、遠くに天草、熊本まで見渡せる。

郷土資料では、幕末島原で行われた人体解剖の図が展示されている。1843年（天保14）領内にある今村刑場で、処刑された囚人の人体解剖が行われた。済衆館（医学館）で豊後の医者賀来佐之に医学を学び藩医であった市川泰朴は、弟子とともに実際解剖の執刀にあたった。

●人体解剖図



島原市蔵 島原市提供

この時代、人体解剖はまれで、医者が執刀することもありなかった。市川泰朴の「解体願書の覚」には、オランダ医学を研究し医術の向上のために人体解剖が重要であることや江戸遊学中に解剖実施に参加したことが記されている。

『蘭学事始』（杉田玄白）には「脳分け」（解剖）を見学（観察）したときの様子が書かれているが、脳分けは当時被差別民とされた人々が行っており、医者は彼らから人体内の構造を学んだのである。（スポット参照）

市川泰朴の願い

医は仁術で難病を救う使命は、洋の東西を問わず同一である。ところが世の中には病人の病を治すことなく只謝礼を貪る悪質の医者が多いことは遺憾なことである。私は医家に生まれ、多くの病人を治療してきたが、不幸にして病人を死に至らせたこともある。自責の念に耐えず、再び過ちを繰り返さないように医術の研鑽に努め、特に阿蘭陀医術を研究してきたが、医術の向上のためには、人体解剖が重要なことを痛感している。

今日、江戸表では幕府の許可を得て死体解剖が実施されている。私も江戸遊学中有志の解剖実施に参加した。一人殺すことは非道のように見受けられるが、これによって万人の命を救うことが出来れば、これは人道に悖（もと）るものとは思われない。さらに解剖した死体は、寺院に頼んで懇ろに供養すれば世間は納得するものと思われる。何卒願の条をお聞き届け戴きたい。以上（「解体願書の覚」市川家所蔵『島原半島医史』）

2

理性院大師堂 台山天如塔

うてなさん てんにょとう



島原市湊道

大師堂は、1895年（明治28）岡山県出身の廣田言証が建立、廣田は病弱で「跣(はだし)の誓願」をたて、四国八十八力所の靈場を裸足で巡礼、雲仙普賢岳で苦行中に靈感を得、この地に開山した。1906年（明治39）インドの仏跡巡礼の途上、ヤンゴン（ラングーン：現ミャンマーの首都）のタボイキヤナン寺のウセツタ僧正から大理石の釈迦如来を受けられ、帰国後1909年（明治42）台山天如塔を建立した。この塔の建設に当たっては明治時代、東南アジア等に連れて行かれた「からゆきさん」からも淨財が寄せられ、周囲にある玉垣には、その名と滞在先などが刻まれている。

「からゆきさん」が多数連れ出されたとされる口之津の歴史民俗資料館には、「からゆきさんコーナー」が置かれ、この地の天如塔や玉垣のいわれが付されている。

3

今村刑場跡



島原市新山

島原は、キリストン大名有馬晴信の領地で、江戸時代の初めまでキリストン王国を形成していた。岡本大八事件（注）に連座し甲斐の国に預けられ処刑された晴信の死後、跡を継いだ直純は、1614年延岡に転封となった。領主となった松倉重政は、江戸幕府の禁教令（1614年）のもと領内のキリストン弾圧を行い、街道に面する今村刑場では多くのキリストンが見せしめのために殺された。イタリア人ナワロ神父は有馬の布教本部長で日本在留34年、1621年（元和7）日本人信徒とともに処刑され灰にして海中に捨てられた。宣教師追放令でマカオに追われ3年後再渡来、「さんたまりあの御組」（コンフラリア・信心会）の掟を残したとされるアントニオ・ジャノネ神父が、1633年（寛永10）この地で殉教している。1658年（万治元）大村崩れで、608人が検挙され斬首411人のうち56人がこの地で処刑された。

また、島原城に展示されている人体解剖図はこの地で行われた処刑の際、描かれた。

（注）岡本大八事件

江戸時代初めに起きた大疑獄事件、晴信はこの事件で、甲斐国に流罪となり、処刑された。岡本大八は、家康の側近本田正純の与力である。

スポット①

医学を支えた人々「解剖」の歴史

小学校の教科書には、「新しい学問・蘭学」という項で、杉田玄白が解剖を見学しオランダの解剖図（ターヘル・アナトミア）が正確であることに驚き、このとき解剖をして内臓の説明をした人は身分制度のもとで百姓や町人とは別に厳しく差別されてきた人が行った、とある。日本で最初の「観臓」（解剖を見ること）は、1754年（宝暦4）京都で山脇東洋が行った。以来、栗山孝庵が萩（山口県）、河口信任が京都で行い、東京小塙原で前野良沢・杉田玄白が行ったのは、1771年（明和8）のことであった。前野良沢・杉田玄白等は3年後の1774年に『解体新書』を著した。医者が直接執刀したのは、1819年（文政2）中津（大分県）の刑場で行った村上玄水が確認され、『解剖図説』を著している。以来20数年を経て人体臓器の研究が行われ、島原藩では1843年（天保14）市川泰朴等が今村刑場で行った。1859年（安政6）には、長崎の西坂刑場でもオランダ軍医ポンペが日本で最初の解剖実習を松本良順等を行った。

「・・・これより各々打ち連れ立ちて骨ヶ原の設け置きし観臓の場へ至れり。さて、腑分けのことは、えたの虎松といへるもの、このことに巧者のよしにて、かねて約し置きしより。この日もその者に刀を下ろさすべしと定めたるに、その日、その者俄かに病氣のよしにて、その祖父なりという老屠、齡90歳なりといへる者、代わりとして出でたり。健やかなる老者なりき。彼奴は、若きより腑分けは度々手にかけ、數人を解きたりと語りぬ。その日より前までの腑分けといへるは、えたに任せ、彼が某所をさして肺なりと教へ、これは肝なり、腎なりと切り分け示せりとなり。それを行き視し人々見過ごして帰り、われわれは直に内景を見極めしなどいひしまでのことにしてありしとなり。」（杉田玄白『蘭学事始』）

スポット②

「島原大変」と普賢岳噴火

1990年（平成2）11月17日に始まった雲仙普賢岳噴火は、火碎流6回・土石流17回（93年まで）など、火碎流・土石流、噴石・火山灰等による家屋焼失・破壊、死者は44人を数えるなど、島原半島に甚大な被害をもたらした。

1996年（平成8）6月3日、山頂を約200メート押上げる平成新山（1488m）を誕生させ収束した。このとき、思い起こされたのが約200年前、1792年の「島原大変肥後迷惑」といわれた寛政の大噴火である。このときは、地震が続発し眉山が大崩落、有明海に大津波が発生し、対岸の肥後・天草（熊本）にも被害が及んだ。死者が1万5千人、流出家屋は約6000戸に及んだという。

現在、島原半島は世界ジオパーク（自然公園・野外博物館）に指定され、「人と火山が共生する肥沃な大地」をテーマに、「ジオさらくマップ」が作成されている。【①千々石断層（大地の裂け目）②雲仙地獄（移動する地獄地帯）③小浜温泉（豊富な熱量）④早崎玄武岩（島原半島の始まり）⑤原城（阿蘇火山の火碎流堆積物）⑥島原湧水群（大地の恵み）⑦眉山の山体崩落（島原大変肥後迷惑）⑧平成新山（島原半島のシンボル）⑨雲仙岳災害記念館（がまだすドーム）⑩龍石海岸（雲仙火山のはじまり）】また「さらくコース」も紹介している。このように島原半島では、二度にわたる大噴火の災害を受け、火山と共生する道を探っている。

火山は災害をもたらすが、同時に豊富な自然と大地も生まれ出したのである。

（参考：松尾卓次講演「資料」、「島原半島ジオパーク」パンフレット）



島原大変大地図<肥前島原松平文庫所蔵>



島原市深江町

1990年（平成2年）11月17日、198年ぶりに普賢岳が噴火活動を開始した。私は小学校教員として初任校となる大野木場小学校に勤めて4年であった。

翌年1991年（平成3年）5月24日、溶岩ドーム最初の崩落が起こり、それまでの土石流の災害に、火碎流という新たな災害が起きてしまった。降灰により外で体育の授業ができなくなり、子どもたちは体育館のみの活動や集会行事となっていました。

この年の6月3日には大規模火碎流が発生（写真参照）し、校舎から隣に見えていた島原市の山沿いの家屋が次々と炎上していった。午後4時過ぎのことである。その時間は委員会活動がっていたため、5・6年生30名以上の児童が学校に残っており、安全確保を行いながらの緊急避難となった。この時、島原市白谷方面から1名の男性（50歳くらい）が着の身着のままで、大野木場小学校へ逃げてこられた。履いていた靴（スリッパ？）は大半が焦げ溶けて、手足にやけどを負っておられた。保健室で養護教諭が応急処置のみを行い、その後、到着した救急車で搬送された。

地元消防団等の緊急出動もあり、現場は騒然とした雰囲気の中で、校長・教頭の指示を受け、土石流対策としての避難場所であった小林小学校の体育館へ高学年児童とともに1次避難をした。

体育館に到着してまもなく、火碎流対策として一刻も早く山側から遠ざかるように指示があり、深江町市民センターへの2次避難となった。この間、日頃からの避難訓練のたまものであり、また、火碎流の流れる方向を教員も児童も冷静に見極めることができていたのだろう、落ち着いた行動で安全に1次・2次避難が行われて、児童全員の避難を完了できた。（我々職員の自家用車はどのように避難先まで運んだかは、今でも記憶が定かではない。）センター到着後、下学年児童の安否確認を、職員が手分けをして電話で行い、午後8時頃までには全員の無事を確認できた。

この後、島原市内と深江町内の学校は1ヶ月早い夏期休業日となり、8月1日からは小林小学校グラウンドに仮設校舎が建設され、深江町内の学校（深江中学校・大野木場小学校・深江小学校）が一緒に生活することになった。

そして9月15日、再び大規模火碎流が発生し、大野木場小学校を含め中大野木場一体（児童の自宅等）が消失してしまった。

これらの普賢岳噴火に伴う大規模火碎流の発生により、44名の尊い人命が犠牲となった。 土手野和広（小学校教員）



旧大野木場小学校に隣接する砂防監視所から普賢岳を望む

5

セミナリオ跡・吉利支丹墓碑



セミナリオ跡 南島原市有家町

吉利支丹墓碑
南島原市西有家町

有家町には国道沿いに「セミナリオ跡」がある。セミナリオとは小神学校とも言われ、全寮制で7年間の教育機関だつたとされる。1579年（天正7）、宣教師ヴァリアーノは口之津にイエズス会士を集め、セミナリオ・コレジオなどの教育施設建設を提案（口之津會議）、翌年有馬と安土にセミナリオを、府内（豊後）にコレジオ（大神学校）を設置した。日本人司祭のほとんどはセミナリオ出身で、ローマに派遣された天正遣欧少年使節の4人も有馬セミナリオの出身であった。秀吉の伴天連追放令以降弾圧から逃れるため、両機関とも場所を移動し、有家にはセミナリオとともにコレジオも置かれたことがある。

また西有家にある墓地の一角に、国史跡の「向浜のキリスト教墓碑」が残されている。蒲鉾型の墓石は地中から掘り起こされたもので、ローマ字の金石文や花十字紋が刻まれている。

「フィリ（娘）作右衛門ディオゴ生年□□御出生以来1610
10月16 慶長15」

なお、南島原市には、100基以上のキリスト教墓碑が点在し、キリスト教史跡公園もある。

6

原城



原城攻防図<島原市蔵 島原市提供>



南島原市南有馬町

島原半島の南部に位置し、有明海に張り出した丘陵にある。宣教師の記録によれば、1599年（慶長5）頃から有馬晴信によって築城されたとされる。本丸、二の丸、三の丸、天草丸、出丸などで構成される。

有馬氏が日向国延岡城に転封となった後の、1616年（元和2）に松倉重政が入城するが、一国一城令の影響もあり島原半島南部にかたより、不便な日野江城・原城を放棄し島原城を築城した。

1637年（寛永14）、島原藩主松倉重政・勝家父子による苛政と、過酷なキリスト教弾圧により島原・天草一揆が勃発した。この一揆は寺沢領の天草でも起きた、島原城・富岡城が襲撃されたが、一揆の攻城はうまく行かず、やがて合流し天草四郎を総大将に約3万7千人がこの原城に立て籠もり、組織だった籠城戦を展開し幕府軍と戦闘を繰り広げた。籠城は3ヶ月に及んだが、兵站の補給もなく、弾薬・兵糧が尽き1638年（寛永15）2月27日から28日にかけての幕府軍の総攻撃で一揆は壊滅した。幕府軍は戦後、原城を徹底的に破壊した。

1938年（昭和13）、原城跡は国の史跡に指定された。発掘調査で城跡から鉛の弾丸やクリスの他、大量の人骨が出土している。

スポット③

島原・天草一揆

島原はキリスト教大名有馬晴信の所領で領民の多くがキリスト教であった。1614年（慶長19）に有馬氏が日向に転封すると、松倉重政が入部した。重政は公儀普請役や島原城築城のため、領民から年貢を過重に取り立て、また厳しいキリスト教弾圧も開始した。次の勝家もその政策を継承した。一方、天草はキリスト教大名小西行長の領地で、関ヶ原の戦いの後に寺沢広高が入部、次の堅高まで島原同様の圧政とキリスト教弾圧が行われた。

圧政下の島原では、地域の指導的立場に立つ旧有馬氏家臣の下に領民の組織化がすすみ、天草でも牢人となった小西行長旧家臣らが一揆を組織した。この背景に、キリスト教の信徒団体コンフラリアの存在がある。一揆指導者は、天草四郎を総大将に蜂起を決め、1637年（寛永14）10月25日、有馬村で復帰したキリスト教が代官を殺害し、一揆が勃発する。

一揆は島原半島の南目地域の組織化に成功し、領民を強制的に一揆に組み込んだ。しかし北目地域の組織化は成功せず、逆に参加を強要する一揆勢と争っている。島原・天草一揆は地域の指導者に率いられた「村の戦争」の一面を持っていた。

一揆の勢いに押され島原藩は籠城して防備を固めた。城下に押し寄せた一揆は、寺社を破壊して城下町を焼き払った。数日後には天草でも一揆が蜂起。富岡城代三宅重利を討ち取り、さらに富岡城を攻めたが、九州諸藩の幕府軍が近づいたため、撤退して原城に籠城した。一揆の正確な数は不明であるが、37,000人程であったといわれる。

一揆に対し幕府は、上使として板倉重昌を派遣した。重昌の下で九州諸藩は原城を包囲・攻撃したが、城の守りは堅く、戦意も高かった。事態を重視した幕府は、さらに老中松平信綱らを派遣した。焦った重昌は1638年（寛永15）1月1日に総攻撃を行なうが失敗した。着陣した松平信綱の下で幕府軍は12万以上に達し、海陸から原城を包囲した。信綱は一揆の動きを詳細に調べ、兵糧攻めに切り替え、一揆の戦意を削ぐためオランダ軍艦に艦砲射撃をさせた。また、内応や投降も呼びかけた。信綱は、食料が尽きた事を待って総攻撃を決定した。2月27日からの総攻撃で原城は落城し、一揆はようやく鎮圧された。

一揆後、島原半島南目と天草は、一揆不参加の少数の領民以外ほぼ根絶され、わずかに残るキリスト教信者は潜伏していく。幕府はこれを機に、禁教政策と鎖国政策を一層強化することとなった。

スポット④

からゆきさん

からゆきさんとは、19世紀後半に、外国に娼婦として売られていった女性たちのことをいう。公文書では「醜業婦」と称された。長崎県島原半島・熊本県天草諸島出身の女性が多かったといわれるが、長崎や小倉、神戸、横浜などの港からも渡航している。また、その海外渡航には斡旋業者（女衒）が介在していた。女衒たちは貧しい農村などをまわって年頃の娘を探し、海外で奉公させるなどといって、その親に現金を渡した。女衒たちは彼女たちを売春業者に渡すことによって手間賃を得た。

買い集められたり、さらわれてきた娘たちは、貨物船の船底に押し込まれた。この密出国は過酷な航海だった。例えばシンガポールまでは約1ヶ月を要したが、換気設備のない船底は高温多湿の灼熱地獄で、水や食べ物もろくに与えられず、排泄物や嘔吐物にまみれ、悪臭の立ち込める闇の中で精根尽き果てて息絶える者もあった。からゆきさんの渡航先はアジア各地であるが、さらに北はシベリア、南はオーストラリア、西はアフリカ、東はハワイ、北米に渡った日本人女性の例もある。

近代日本国家は、明治中期まで欧米諸国に太刀打ちしてアジアの国々に植民地進出していくことができなかった。そのため、元手要らずの経済輸出=からゆきさんを大量に赴かせるという方策を採った。その後、国際政治における日本の国勢が盛んになるにつれて、彼女らの存在は「國家の恥」であるとして非難されるようになった。1920年の廃娼令とともに海外における日本人娼館も廃止された。多くが日本に帰ったが、更生策もなく残留した人もいる。

「からゆきさん」という言い方は、戦後も30年ほどたった頃の『サンダカンハ番娼館』（山崎朋子）、『からゆきさん』（森崎和江）の出版によって一般的になった。その後、日本に出稼ぎに来る東南アジア人女性たちが急増した。日本から外国へという「からゆきさん」との対比で、外国から日本への出稼ぎ女性を指して「ジャバゆきさん」という言葉が生まれた。

「⑦口之津歴史民俗資料館」参照



南島原市口之津町甲



(与論館)



(からゆきさんコーナー)

島原半島南部に位置する天然の良港、口之津は、南蛮船来航、石炭積み出し港、船員の町として海とともに発展してきた。

日野江城を拠点に島原半島一帯を治めていた有馬義直がポルトガルとの貿易を目的として開港したのは1562年。その翌年、イエズス会のポルトガル人医師アルメイダ、日本布教長トルレスが訪れ、口之津教会を建立。日本でのキリスト教布教的一大拠点となった。現在、東大泊地区の交差点付近に「伝 口之津教会跡」記念碑が設置されている。

明治に入り、福岡県大牟田市の三池炭鉱の石炭取り扱いを担っていた三井物産が石炭積み出し港に設定。口之津は再び賑わう日々を迎えた。三池は大型船が入る港が整備されておらず、直接輸出ができなかつたため、石炭を和船で口之津に送り、はしけ舟で港内の大型船へ積み替える方法をとった。

1878年、石炭輸出港指定を受けて海外輸出が本格始動。96年に輸出入貿易港に指定され、輸出量は急伸。長崎港の数倍の貿易額を誇った。

はしけ舟から大型船への積み替えは一隻当たり4500人の港湾労働者が必要だと推計されている。大型船が多いときには5隻同時に入港するなど輸出量が増えるにつれ、港湾労働者不足が顕著になった。98年頃、鹿児島県の甑島、与論島などで労働者を募集。1900年代初めには少なくとも1200人が移住し、積み出し作業に従事した。

石炭輸出で沸いた口之津のにぎわいの陰には、異国で過酷な運命を強いられた女性が存在した。「島原の子守唄」4番の冒頭に「姉しゃんなどけいたろうかい 姉しゃんなどけいたろうかい 青煙突のバッタンフル」とある。「青煙突のバッタンフル」は口之津に寄港した外国籍の石炭輸出船。これらの舟で東南アジアに「からゆきさん」として送られた女性の大半は、現地で娼婦として働かされ、家族を思いながら異国での生涯を終えた。

口之津の景気がかけり始めたのは1910年。この年、三池港が整備され、口之津をへずに石炭輸出ができるようになったのである。石炭輸出の「灯」が消えた口之津は高度経済成長真っただ中の66年、貿易港の歴史に終止符が打たれた。

明治洋風建物の長崎税関口之津支庁を改修した歴史民俗資料館には、貴重な生活用品や生産用具などとともにキリシタン遺物が展示され、「からゆきさんコーナー」も置かれている。

●与論館

口之津歴史民俗資料館には、「与論館」がある。与論島は奄美諸島の南端の位置し、沖縄本島に近い。1899年（明治32）年7月、台風に続いた旱魃、病気等により、死者が続出し住民は飢えに苦しんだ。口之津は当時、大牟田にある三井三池炭鉱の石炭積出港に指定され、活況を呈していたが労働力不足に苦しんでおり、両者の思惑が一致、与論島住民の口之津移住が決定した。同年の250人を皮切りに、口之津の移住した与論島住民は、1200人にも達したという。彼らは三池炭鉱から運ばれた石炭を外国船に積み込む作業に従事し、与論長屋と呼ばれた住居で生活した。ところが1910年（明治43）三池港が開港し、口之津への石炭移送は行われなくなり、与論出身者たちは三池港に移住した。

2010年にはその100周年を迎え、4月4日大牟田市で記念式典と祝賀会が行われた。読売新聞（2010.5.8）は、「与論集団移住100年」と題する特集記事で「炭鉱支えた島人魂 今も」「差別から誇りへ 歴史に光を」と伝えている。

8

雲仙地獄・耳採



1616年（元和2）日向に転封した有馬直純にかわって島原に入部してきた松倉重政は、当初はキリスト教の布教も黙認していたが、やがて迫害に転じ、なかなか改宗しないキリシタンに対して次第に弾圧もエスカレートしていった。

1627年（寛永4）にはパウロ内堀作右衛門ら16名が雲仙地獄で煮えたぎる熱湯をかけられたり、湯壺に沈められるなどの拷問を受け、殉教した。

1622年（元和8）から10年間長崎奉行を務め猛烈な迫害を行った竹中采女正重義も、1629年（寛永6）からなお改宗しないキリシタン64名を長崎の牢から雲仙に連行した。これを「山入り」という。長崎から茂木をへて、船で海を渡り小浜に上陸して雲仙に登った。途中で逃亡防止のため耳をそぎ落としたことから「耳採」の地名が残っている。転向を目的とする拷問は過酷をきわめ、10日から1ヶ月の長期にわたった。このなかには、秀吉の朝鮮侵略によって連行された朝鮮人女性のイサベラがいた。13日間の硫黄熱湯責めにも屈することなく、足腰が立たず体の自由がきかないイサベラの手を取って無理に転び証文に爪印を押させたが、それでも信心を捨てなかつたという。

9

首塚・千々石ミゲル碑



首塚
雲仙市愛野町



千々石ミゲル碑
雲仙市千々石町

<首塚>

島原領と諫早領の境に位置し、近くには島原藩の原口番所があった。1637年（寛永14）の島原・天草一揆終結後、キリシタン1万の首を天草富岡・長崎西坂とこの地愛野の3ヶ所に分けてさらし、後に埋めた跡と言われる。

なお、島原・天草一揆の初期に、千々石村の一揆農民と北目四ヶ村の農民が戦った後、戦死者を葬った跡とも言われている。島原・天草一揆はキリシタン農民と島原藩兵の戦いというだけではなく、代官や庄屋など上層農民に率いられた農民同士の戦いという一面もあった。

また、現在では、6～7世紀の古墳ではないかとも考えられている。

<千々石ミゲル>

有馬の臣家で、千々石蓋城主千々石直貞の子として1569年（永禄12）頃生まれた。1580年（天正8）に洗礼を受け、有馬のセミナリオに学んだ。1582年（天正10）、巡察使ヴァリアーノが計画した「天正遣欧使節」に、伊東マンショ・中浦ジュリアン・原マルチーノとともに参加した。この時ミゲル13歳、ローマでは教皇グレゴリウス13世に謁見した。1590年（天正18）に帰国。天草のコレジオで勉学を続け、他の三人と共にイエズス会に入会した。しかし、1601年（慶長6）にはイエズス会を退会、清左衛門を名乗り、大村喜前に仕える。その後結婚、信仰も捨て長崎で暮らすが、大村喜前や有馬晴信から疎まれるなど失意の内に世を去った。信仰を捨てた理由は定かではない。この清左衛門夫妻のものと思われる墓所が2003年（平成15）に諫早市多良見町で発見された。

島原の子守唄・考

田中良彦(作家・中学校教員)

1. 「哀れみ」と「うらやみ」

ここ2年ほどの間に、この歌について、あちこちで、話をした。すると、参加者から、感想とも質問ともつかぬ言葉が出てくる。

まず、三重県での話だ。県央部のある町の講演会で、あいさつに立たれた70歳代の役員さんが、こんなことを言われた。「きょうは、島原の子守歌について、田中さんから話を聞くが、わたしは若いときにこんな経験がある。ある酒の席でのことだ。気分が良くなって、そのころよく聞いていた島原の子守歌をみんなの手拍子で歌ったが、どうも乗らない。みんなも、どこかうつろな手の打ち方で、こりやあ、この歌はできんなあ、と思ったことがあった。盛り上がるべきお座敷で、なんであんなに静まってしまったか・・・」

次に、佐賀県内での講演会で、ある女性がこう言わされた。
30歳代と思う。

「自分は、島原の出身です。子守歌はおばあさんからよく聴いた。しかし、その意味を尋ねても、決して教えてくれなかつた・・。お話を聞いて、そのわけがわかりました。」

さらに、福岡県の筑後地方では、こう言われた。50歳代後半の男性だ。

「わたしは、島原の、有家の出身です。しかしこの子守歌の中身をよく知らなかった。いったい、この歌を、地元の人たちや、歌っておるのでしょうか？」

貧しさゆえに異国へ売られていった娘たちを哀れむ一方で、少数ながら成功して帰ってきた「からゆきさん」をうらやむ貧しい奉公娘の心情をうつしたこの歌は、宮崎康平（1917～1980）による戦後の創作子守歌といわれる。1957（昭和32）年に島倉千代子、1960年にペギー葉山がレコードを出し全国的に広がった。

そんな歌の来歴もあって、世代を問わず、みんながこの歌を知っている。そして誰もが、「知っているものの、よく知らない・・。」要するに、ちょっと聴いたぐらいでは理解できない中身を含んでいる、と感じる。それも直感的に、その暗さ、哀しさを受け取るのである。

そして、「どうも、この子守歌には、われわれが、忘れてはならない命の物語が秘められているようだ。」と記憶の糸を紡ぎ始める。

2. 「見つめ直す」

わたくしは、五木の子守歌（熊本県）や竹田の子守歌（京都）と並べて、この歌を論じることもある。だが、この歌は、全く別のジャンルにあるものだ、とそのたびに考える。例えてみると、「星の流れに」（1947年・菊池章子）や「石狩挽歌」（1975年・北原ミレイ）に通じる系譜の歌である気がする。それは濃密な情念に満ちた怨みをはらみつつ、はるかに浄土を見るという、まったく因縁の深い歌である。

聴く側の人間に、その情念を受け取る用意があるかどうかが、問われる世界の歌なのだ。

わかりきったことだが、歌に道徳性や倫理観を過度に求めではない。

それを思えば、この「島原の子守歌」は、モラルに縛られすぎたわたくしたちを見つめ直すという側面さえ持つ。だから、この歌がすんなりとはらわたに沈んでいかないわけである。

目をそむけてはならぬことに少しずつでも近づくためにわたくしたちは、近代日本の暗部にそろりと降りていかねばならない。今の自分のままで、行くことができるだろうか。



島原鉄道島原駅前にある
「島原の子守唄」像

ご協力いただいた方・団体

田中良彦（作家・中学校教員）

土手野和広（小学校教員）

島原城

島原市

肥前島原松平文庫

口之津歴史民俗資料館

他

デザイン／カット 西岡由香

ガイドブック

島原半島をフィールドワークする

2012年1月10日 発行

NPO法人 長崎人権研究所

〒850-0048 長崎市上銭座町2番7号

TEL 095-(847)8690 Fax 095-(847)8696

E-mail anan@sings.jp

<http://homepage3.nifty.com/naga-humanrights/>



ガイドブック

島原半島をフィールドワークする

NPO法人 長崎人権研究所